

素描三題

芥川龍之介

青空文庫

一 お宗さん

お宗^{そう}さんは髪^{かみ}の毛^けの薄^{うす}いためにどこへも縁^{えん}づかない覚悟^{かくご}をしてゐた。が、髪^{かみ}の毛^けの薄^{うす}いことはそれ自身お宗^{そう}さんには愉快^{えき}ではなかつた。お宗^{そう}さんは地肌^{ぢみ}の透^すいた頭^{かぶ}へいろいろの毛^け生^はえ薬^{くすり}をなすつたりした。

「どれも広告^{こうこく}ほどのことはないんですよ。」

かういふお宗^{そう}さんも声^{こゑ}だけは善^よかつた。そこで賃^{かた}仕事^{てま}の片手間^{かたてま}に一中^{いちちゅう}節^{ぶし}の稽古^{けいこ}をし、もし上達^{じやうたつ}するものとすれば師匠^{ししやう}匠^{やう}になるのも善^よいと思^{おも}ひ出した。しかし一中^{いちちゅう}節^{ぶし}はむづかしかつた。のみな

らず酒癖さけくせの悪い師匠は、時々お宗さんをつかまへては小言こご以上の小言を言つたりした。

「お前などは肥こへたご桶をけを叩いて甚句じんくでもうたつてお出いでなさりや善いいのに。」

師匠は酒の醒さめてゐる時には決してお宗さんにも粗略ではなかつた。しかし一度言はれた小言はお宗さんをひがませずには措おかなかつた。「どうせあたしは檀那衆だんなしゆうのやうによくする訣わけには行いかないんだから。」——お宗さんは時々兄さんにもそんな愚痴ぐちなどをこぼしてゐた。

「曾そ我の五郎と十郎とは一体どつちが兄さんですか？」

四十を越したお宗さんは「形見かたみおくり」を習つてゐるうちに真ま

面目^{じめ}にかういふことを尋ねたりした。この返事には誰も^{たうわく}当惑した。誰も？——いや「誰も」ではない。やつと小学校へはひつた僕はすぐに「十郎が兄さんですよ」といひ、反^{かへ}つてみんなに笑はれたのを羞^{はづか}しがらずにはゐられなかつた。

「何しろああいふお師匠さんぢやね。」

一 中節^{いちちゆうぶし}の師匠^{ししやう}になることはとうとうお宗^{そう}さんには出来なかつた。

お宗さんはあの震災のために家も何も焼かれたとかいふこととだつた。のみならず一時は頭の具合^{ぐあひ}も妙になつたとかいふことだつた。僕はお宗さんの髪の毛も何か頭の病氣のために薄いのではないかと思つてゐる。お宗さんの使つた毛生え薬は何も^{ばいやく}売薬ばかりではない。お宗さんはいつか^{かうもり}蝙蝠^{かうもり}の生き血を一面に頭に

塗りつけてゐた。

「鼠の子の生き血も善いといふんですけれども。」

お宗さんは円い目をくるくるさせながら、きよとんとしてこんなことも言つたものだつた。

二 裏畠

それはKさんの家の後ろにある二百坪ばかりの畠だつた。Kさんはそこに野菜のほかにもポンポン・ダリアを作つてゐた。その畠を塞いでゐるのは一日に五、六度汽車の通る一週間ばかりの堤だつた。

或夏も暮れかかった午後、Kさんはこの畠へ出、もう花もまれ
 になつたポンポン・ダリアに鋏はさみを入れてゐた。すると汽車は堤の
 上をどつと一息ひといきに通り返りながら、何度も鋭い非常警笛を鳴ら
 した。同時に何か黒いものが一つ畠の隅へころげ落ちた。Kさん
 はそちらを見る拍子ひやうしに「又庭鳥にはとりがやられたな」と思つた。そ
 れは實際黒い羽根はねに青い光沢くわうたくを持つてゐるミノル力種しゆの庭鳥
 にそつくりだつた。のみならず何か雞冠とさからしいものもちらりと見
 えたのに違ひなかつた。

しかし庭鳥と思つたのはKさんにはほんの一瞬間だつた。Kさ
 んはそこに佇たたずんだまま、あつけにとられずにはゐられなかつた。
 その畠へころげこんだものは実は今汽車に轢ひかれた二十四五の男

の頭だつた。

三 武さん

武さん^{たけ}は二十八歳の時に何かにすがりたい欲望を感じ、（この欲望を生じた原因は特にここに言はずともよい。）当時名高い小説家だつたK先生を尋ねることにした。が、K先生はどう思つたか、武さんを玄関の中へ入れずに格子戸^{かうし}越しにかう言ふのだつた。

「御用向きは何ですか？」

武さんはそこに佇^{たたず}んだまま、一部^{いちぶ}始終^{しじゆう}をK先生に話した。

「その問題を解決するのはわたしの任ではありません。Tさんの

ところへお出でなさい。」

T先生は基^{キリスト}督教的色彩を帯びた、やはり名高い小説家だった。武さんは早速^{さつそく}その日のうちにT先生を訪問した。T先生は玄関へ顔を出すと、「わたしがTです。ではさやうなら」と言つたざり、さつさと奥へ引きこまうとした。武さんは慌^{あわ}ててT先生を呼びとめ、もう一度あらゆる事情を話した。

「さあ、それはむづかしい。……どうです、Uさんのところへ行つて見ては？」

武さんはやつと三度目にU先生に辿^{たど}り着いた。U先生は小説家ではない。名高い基^{キリスト}督教的思想家だった。武さんはこのU先生により、次第に信仰へはひつて行つた。同時に又次第に現^{げん}世^せには

珍らしい生活へはひつて行つた。

それは唯はた目には石^{せつけん}鰯や齒^{はみが}磨きを売る行^{ぎやうしやう}商だつた。し

かし武さんは飯^{めし}さへ食へれば、滅^{めつた}多に荷を背^{せお}負つて出かけたこと

はなかつた。その代りにトルストイを読んだり、蕪^{ぶそん}村句集講義を

読んだり、就^{なかんづく}中聖書を筆写したりした。武さんの筆写した新

旧約聖書は何千枚かにのぼつてゐるであらう。兎^とに角^{かく}武さんは昔

の坊さんの法華^{ほけきやう}經などを筆写したやうに勇猛に聖書を筆写した

のである。

或夏の近づいた月夜、武^{たけ}さんは荷物^{せお}を背負つたまま、ぶらぶら

行^{ぎやうしやう}商から帰つて来た。すると家の近くへ来た時、何^やか柔かい

ものを踏みつぶした。それは月の光に透かして見ると、一匹^{ひき}の墓

がへるに違ひなかつた。武さんは「俺おれは悪いことをした」と思つた。それから家へ歸つて来ると、寢床の前にひざまづ跪き、「神様、どうかあの墓ひきがへるをお助け下さい」と十分ほど熱心にきたう祈禱をした。

（武さんは立ち小便をする時にも草木くさきのない所にしたことはない。尤もその為もつとに一本の若木の枯れてしまったことは確かである。）

武さんを翌朝起したのはいつも早い牛乳配達だつた。牛乳配達は武さんの顔を見ると、紫がびんかつた壺をさし出しながら、晴れやかに武さんに話しかけた。

「今あすこを通つて来ると、踏みつぶされた墓ひきがへるが一匹向うの草の中へはひつて行ゆきましたよ。墓がへるなどといふやつは強いものですね。」

武さんは牛乳配達の帰つた後、早速感謝の祈祷をした。——
これは武さんの直話である。僕は現世にもかういふ奇蹟の行はれ
るといふことを語りたいのではない。唯現世にもかういふ人のゐ
るといふことを語りたいのである。僕の考へは武さんの考へとは、
——僕にこの話をした武さんの考へとは或は反対になるであらう。
しかし僕は不幸にも武さんのやうに信仰にはひつてゐない。従つ
て考への喰ひ違ふのはやむを得ないことと思つてゐる。

(昭和二・五・六)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1971（昭和46）年10月5日初版第5刷発行

入力：j.utyama

校正：j.utyama

1999年2月15日公開

2004年3月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

素描三題

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>